

我が研究生活

—平安朝研究四十五年（四）—

山中 裕

先回は、昭和五十六年三月で東大史料編纂所を定年となり、同年四月より関東学院大学教授となつたところまでで終つたため、今回は五十六年四月より始めることとする。

さて、関東学院大学は、昭和四十三年に文学部が新たに出来、そのときより、日本史の非常勤講師として迎えられた。東大史料編纂所教授を勤めるかたわら、一週に一度、講師として十三年間つづけていたのであるが、ここに至つて専任教授として関東学院大学へ入つたのは感無量なものがあつた。ここの文学部は、当時、社会学科と英文学科の二つの学科のみであつたが、学生が三年になると、いづれのゼミに入つてもよいという制度があつた。社会・英文両学科ともに、それぞれの学生は、専門の社会学・英文学のゼミに入る人が最も多いということは言うまでもないが、その中の幾人かは、歴史とか文学とか哲学とかという風に、自分の好みによつてゼミを選択することが出来るという大変よい制度だつた。そこで、私も文学部のゼミを受け持ち、摂関政治・藤原道長・栄花物語・御堂関白記などを扱つた。卒業論文もあり、皆しつかり勉強して、百枚、二百枚の論文を書く人もいて、私も本当に一生懸命になつて古記録の読み方などを教授し、楽しかつた。そのようなゼミであつたから、

皆が一生懸命になり、四年生のときも就職で多忙であつても彼等は最後まで頑張つて卒論を書き、卒業のときに、何人かの人の中には、もう一年あれば、もっとよい論文がかかるのにと、今やつと論文を書くことや勉強の方法が分かつてきたのに、ここでもう卒論を出してしまわなければならないのは残念だという人が少なくなかつた。

さて、次に、私の新しい環境について述べて行こう。

このように、昭和五十六年は、新しい大学へ移つたため、なかなか多忙で落ちつかなかつた。そこで自分の研究も、この年は、それ程、完成していないが、前年、前々年より企画中であつた遠藤元男氏との共編の『年中行事の歴史学』及び今井源衛氏と共編の『年中行事の文芸学』が、この年に完成した。『年中行事の文芸学』は、今井源衛氏が九州より上京する度に弘文堂へ集まり、夜おそくまで検討した。今になってみるとよき想い出である。これらは歴史学・国文学界の第一線の人々が協力して書いてくだされ、今まであまり例のない企画として嬉しかつた。

この年十一月、『平安時代の歴史と文学』と題して、吉川弘文館より、私の編で、定年の記念論文集二冊の本が出版された。これも歴史・文学ともに平安朝の研究者の主たる人々が執筆して下さつた。

さかのほつてこの年三月、論文ではないが、三十数年勤務の史料編纂所のくらしをふり返つて、『東大新聞』に、その想い出を書いている。

史料編纂所を去るのは感無量で、私にとつて喜び悲しみを含んだ史料編纂所の想い出に筆をとっていると涙の落ちるのを隠すことが出来なかつた。

さて、昭和五十七年の研究業績は、少し多くなつた。先ず国学院大学

の雑誌『国史学』に掲載された「藤原道長と摂関政治」を挙げる。これは国学院大学国史学会の公開講座で講演したもので、請われてそれをまとめたものである。これは後に『平安時代の古記録と貴族文化』（思文閣出版、昭和六十三年）に入れている（後述）。この『国史学』の論文は、原稿用紙約百枚の大作であって、今まで摂関政治や道長とともに歩んできた私の研究生活の中でも、かなり掘り下げたものとなった。

同五十八年は「生活文化としての年中行事」を含む『近世風俗図譜第一巻年中行事』を武田恒夫氏との共編で完成した。このシリーズは林屋辰三郎・山根有三・武田恒夫の三氏の編集による全十三巻よりなるもので、そのうちの第一巻を武田氏と二人で責任編集をしたものである。大隅和雄・久保田淳・吉田友之の諸氏にも執筆いただき、自分でも大へん満足のいくものが完成出来たと喜んでゐる。美しい図柄で年中行事を表した楽しい書物である。

この年、角田文衛博士古稀記念論集として『古代学叢論』が出版された。『源氏物語』の準拠論について」と題して私は論じた。即ち、『源氏物語』の準拠に道長がどれ程とり入れられているかなどについてのべたものであるが、その結果、一応、古い定説では『源氏物語』の準拠は長和年間が最後であると言われているが、道長、その他、小一条院（これは準太上天皇ということから）の準拠・モデル論から、それを寛仁年間まで下げることが出来るということを明かにしたものである。その年、十二月、坂本太郎博士の頌寿記念で、『日本史学論集上巻』が完成した。これには「源高明論」を執筆した。史料編纂所の晩年に源高明の伝記を大日本史料の第一編之十九に編纂したことがあるが、それを論文として

まとめたものである。また、同じく十二月には遠藤元男氏の頌寿記念論文集である『日本古代史論苑』が出版されたが、これには「御堂関白記」と『栄花物語』と題して論をまとめた。同じ道長を語る文献として一つは日記であり、また一つは物語である。両書の相違をことごとく挙げ、『御堂関白記』の特徴と『栄花物語』との微妙な相違について述べたものである。

次で昭和五十九年には三月に「昭和史―昭和における源氏物語の研究」をまとめた。これは関東学院の特輯講義で、数人の先生がそれぞれ昭和についての何かの研究を講義するものであった。私のものは、昭和における『源氏物語』の研究がいかに進んできたかをまとめたもので、大正末期から昭和にかけて藤岡作太郎氏をはじめ、島津久基・池田亀鑑氏ら数十人の研究者が続出して現れたが、昭和十三年に阿部秋生氏の『源氏物語の成立順序』が、戦時中の『源氏物語』研究に大きな光を放った。この阿部氏の業績以後、昭和二十年まで、『源氏物語』についてはこれという研究はなかった、と言っても過言ではない。阿部氏の研究は今なお光っている。この論文はその後の昭和の『源氏物語』についての研究業績を昭和四十年までまとめたものである。

同じくこの年は、数年前より研究を進めていた人物叢書『和泉式部』（吉川弘文館）を、完成することが出来た。和泉式部の伝記研究というのは思ったより大へんであった。文献史料が少ないために、先ず、和泉式部の歌集である、『和泉式部集』の一つ一つの和歌を全部ほどいて解し、その歌を編年体と並べるといような作業から始めなければならなかった。しかも研究論文は非常に多く、いづれも推定説が多い。歴史的

立場から確定的に論ずるのは大へんにむづかしかった。それでも、国文学界の多くのすぐれた研究に支えられて完成することが出来たのである。

なおこの年は『文学・語学』に「栄花物語」の歴史叙述をめぐって」を出している。

やがて関東学院に於ても専任教授として入って以来、五年経ち、昭和六十年となった。はじめ同五十六年に入ったときには、歴史学科が文学部に出来るといつていたのが完成せず、国際文化コースというのが出来てしまった。そのコースがいづれ近いうちに学科になるという話であったが、物事は、そうはうまく行かないもの。遂に四年後には国際文化コース解体ということになり、国際文化コースは消滅した。

この年、昭和六十年は『関東学院大学文学部紀要』に「源氏物語の賜姓源氏と摂関制」をまとめた。平安初期から中期へかけて摂関政治華やかなりし頃の賜姓源氏の特徴を歴史的にたどり、藤原摂関政治を語るのに、当時の源氏をおろそかにすることは出来ず、そこでそれらの問題を中心に当時の模様を歴史的に実際の賜姓源氏と源氏物語の源氏とを比較検討しつゝ、歴史の真相を究めたものである。つづいて同じ頃、関東学院経済研究所から「中世の金沢と鎌倉」について原稿を依頼され、これも金沢文庫に住居する私にとって大へん嬉しい注文で、喜んで引き受け完成させたのである。

この年、国書刊行会（後に高科書店）より『栄花物語研究第一集』を出版した。以前から私は主に、若い人々と「栄花物語研究会」をやっていた。昭和四十八年から現在もそのままつづけている。月一度、学士会館に集合し、一人づつが発表担当者となり、それについて全員で

討論するのだった。皆よく研究をつづけ、その第一回目の成果を収録したものがこの書である。ここに私は「栄花物語の編纂と年紀表現について」を執筆した。

同じく、「御堂関白記研究会」も京都平安博物館（現在は古代学研究所）で年に一回、一週間連続の集中講義のかたちで昭和四十三年より毎夏八月に行っていた。そして発表者がそれをまとめて原稿に書き、それを私がもう一度見て、手を入れる場合は手を入れ、「古代文化」に連載していったのである。これはこの研究会のたまものである。『古代文化』の「御堂関白記注釈」も大分多くなってきたため、この辺で一冊の本にしようとの企画の下に、国書刊行会（後に高科書店）から第一冊目がこの年、『御堂関白記全注釈寛仁元年』として完成した。

また、『御堂関白記』について、もう一つ論文を書いている。それは『御堂関白記と年中行事―新嘗会・五節を中心として』（小笠原長和氏編『東国の社会と文化』所収）である。また『国文学解釈と鑑賞』に「道長の虚像と実像―栄花物語と御堂関白記」を出している。

さて、その翌年、昭和六十一年は、六十五才となったため、特約教授となった。これは大へん有難い制度で、教授会、その他、多くの会議にはいづれも出席しなくてよいというものであり、ただ、教育と研究を充分にするようにとのことであった。講義以外は全部開放され、こんな気分のはよいことは、先ずなかったのである。

さて、昭和六十一年には、先ず、『書道芸術』に藤原公任を依頼され、公任の伝記をまとめた。

なお、この年は上行寺遺跡の破壊の問題があった。これは金沢八景の

近くの遺跡であり、おそらく中世の遺跡であることはまちがいないという学界の定評もあり、我々は、この遺跡を最後まで頑張つて残したいと思つて一生懸命になつていたのだが、遂にマンションを建てるといふことで破壊されてしまった（現在、そこにはライオンズマンションが建っている）。関東学院大学に於ても、これについては人文科学研究所主催で二、三回、この遺跡のいかに重要なものであるかを明かにするための歴史講演会を行ない、東大助教授（その当時のこと。現在は国学院大学教授）の千々和到氏をはじめとして外部からも多くの学者に参加してもらつた。人々の参加も大へん多く、署名運動も多く集まつたが、遂にその遺跡はこわれてしまった。もし、現在、この遺跡が残存していれば、中世の研究に大きな成果を挙げていることであらう。

つづいて研究の方では、この年、「源氏物語の構想と成立の年代について」（『国文学解釈と鑑賞』）を出しているが、これは今までの『源氏物語』についての私の研究成果をまとめたものである。前にも述べたように成立年代について、私は長和説に反し寛仁説をとるところである。寛仁まで延長するように考えたい。

昭和六十二年は、雑誌『墨』に御長老の源豊宗氏とさらに小松茂美氏と私の三人で「三蹟とその時代」に関する座談会を開催している。源豊宗氏は高齢であるにも拘らずお元気で、私たち二人が関西まで出向きますと言っているにも拘らず上京され、三人で楽しく対談させてもらった。源豊宗氏は話題も豊富であり、お教えにあづかる所、多大であつた。

以上、昭和五十六年より六十二年までの私の生活状態と研究成果の主なるものを挙げてきた。

その間、短い原稿で『日本古典文学会々報』90号より102号までに、正月より十二月までの年中行事について採り上げている。また、同じく104・107、109、111、113号の七回にわたり、こちらは「古記録と物語・かな日記の間」と題して「拝礼と『和泉式部日記』」をはじめとして平安朝の人物と文献との間の、微妙な歴史上の問題を主として採り上げた。

以上をふり返してみると、この数年間の私の仕事は、やはり撰関政治の研究を中心に進められており、『御堂関白記』『栄花物語』を主たる文献としてそれを基本に読み、この二つの文献は、史料そのものの研究も同時に進めてきた。一方、それらの文献を主にして道長をはじめ、公任など人物史の研究を進めてきた。また、その周辺の人物、例えば和泉式部など、撰関貴族と女流作家たちの生き方を深めていくことによつて、平安貴族社会の実態を明かにせんと努力してきたと同時に、その後も、その方法で研究を進めている。その一方で、『源氏物語』の研究も、歴史的に見ていくことを、相変わず、ずっと継続してやっていた。また一方で、平安貴族社会の研究を進めるには、当時の儀式、年中行事などを有職故実的に研究を進めて行くことを常に忘れてはならない。そこで、その方面についても、数多くの種類の年中行事を採り上げて、こちらの面は、『西宮記』を中心に、『江家次第』などを主として、古記録類即ち『御堂関白記』『小右記』『権記』などと比較検討しつつ、平安期において、道長等の貴族たちが、儀式を自分たちの生活の中にいかに採り入れていたのかを明かにしていく研究を進めてきている。こちらは、なお将来に向つて私自身、大いに勉強せねばならない。

また一方、撰関政治の研究には、藤原氏の道長等の生活はもちろんの

こと、賜姓源氏の源高明を中心に、それらの人々の生活の実態を明らかにするとともに、公卿として彼等源氏の貴族が、藤原氏の人々と、どの様に関連をもつて生きていたかなどの研究も進めてきている。

もう一つ、『源氏物語』から『栄花物語』への影響を明らかにし、『栄花物語』は、極端に言えば、『源氏物語』がなければ、生まれなかつただろうという面を中心に、『源氏物語』が『栄花物語』を生む動機となつたことを明らかにした。

なお、もう一度、最後の原稿がある。現在、平成七年まで、これ以降、八年間の研究生生活を執筆する予定である。

（やまなか・ゆたか 調布学園女子短期大学教授）